

『小説・修復腎移植』



著者・青山淳平

挿絵・山本良秋

発行所・本の泉社

支援

反響は内藤がいったとおりになった。

急いで帰宅し、パソコンで有吉からのメールをひらき、すさまじさがわかった。

「大変なことになっています。お昼ごはんは、電話子機をそばにおいていただきました。これではとても音楽教室はできません。うれしい悲鳴です。さつき、あさつての日曜日まで、レッスン中止のメールを生徒さんにうちましました。今日、朝から夕刻の六時まで、電話はなんと七十回をこえました。愛媛新報の「臓器移植特集」はネットで日本中の方がお読みになっていますのですね。電話は県外の中四国から北海道までたくさんありました。とくに大阪が多かった。あつ、また鳴っています。でも六時以後は出ませんよ。あとは水野さんをお願いします。とにかく大盛況です。一家総動員で対応しました。支援の申し込みがあった方の氏名、連絡先、所属はエクセルで一覧表をつくれます。また、いろいろなご意見もいただいています。これらもまとめて、ひとまず日曜日を目途にお送りします。さて水野さま、これからお一人での受付、御苦労さまです。きつと夜、遅くまでかかってくると思います。くれぐれもご自愛のほど 有吉裕美」

メールを読んでいるあいだにも電話が鳴っていた。

義母には事情を話し、久美子を預かってもらっているから、家のなかの水野ひとりである。パソコンからはなれ、食堂へゆくと、受話器を耳にあてた。高知県の四万十市で農林業をいとなむ農夫だった。もう二十年以上も前、母親の腎臓をわけてもらい、生体腎移植をした。執刀した丸山医師からの説明は口頭だけだったが、腎臓は生着し、母親ともども元気で暮らしている。いまの生活があるのは丸山医師のおかげである。支援したいので会員になりたい、と申し出た。そして話している間にも、別の電話がかかっている発信音がする。必要なことをメモし、つぎの電話にでていると、また発信音がひびいてくる。話を聞く時間をおしめ、いそいでメモをとり、つぎの電話にでる。夕食を食べる間もなく、こんなことのくりかえしが夜の十時すぎまでつづいた。ありあわせの惣菜で夕食をとり、ひといきいれたのは十一時をこえてからである。支援を申し込んだ人数は四十をこえていた。それから三人ふえ、夜の十二時をまわると、電話はぴたりと鳴りやんだ。三十分待つてもひっそりしていたが、水野はまたかかってきそうな気がして布団を食堂に運び、蛍光灯の明かりを半分になると、枕もとにメモ用紙をおいて目をつむった。

寝入りばなだった。けたたましく電話が鳴った。

「こんな時間にすみません」

受話器から野太い声がひびいた。

自分は御荘町の手前の菊川に住む向井原陽二という者だ。新聞で水野が会を立ち上げることを知った。夕方からなん回もかけたが、通話中だった。つぎつぎに申し込みがあるらしく、うれしいことだ。と向井原はいった。

メモをとりながら、水野の脳裏に真珠筏がうかぶ菊川の入り江の光景がよぎった。

「真珠で有名なところですね」

「それは昔のこと。いまはさっぱりいかん」

向井原はぶつきらぼうに応じた。

御荘町の支局に勤務していたころ、水野は菊川の真珠会館を訪ねたことがある。まだ景気の良いころで、入り江に面した会館のよこにはヘリポートがあった。

「よかったら、お仕事を」

「まき網漁をしとる。いま明かり（集魚灯）を海中へいれて、アジとイワシを集めよる」

「いまって？ 出漁中ですか」

「そう、宇和海や。もうじき網が入る」

向井原はまき網漁あみりょうの船団の探索船司令室から衛星電話で水野にかけていた。かれはつぎのようにいった。透析では船団の船長はつとまらない。移植したからこそ、五隻の船団を指揮し、漁船員の家族を食べさせることができる。国は病腎移植を禁止しようとしているが、みとめさせる運動をしたい。手伝えることがあれば、なんでもやる。遠慮なく行って欲しい。

「今月中に、宇和島で設立総会をやりませう。来てくださいますか」

「そりゃ、どんなことがあっても、行きませう」

向井原は歯切れよく約束した。

検診で宇和島へでかける前日だった。

水野は帰宅する前に新聞社の近くの喫茶店で有吉に会った。お互いにメールで情報を交換していたが、この日までに集計した入会申込者の一覧表と意見をプリントにし、有吉がもってきてくれた。

申し込みの電話は土曜日がピークで、火曜日の今日はぐっと減り、自宅を

出るまでに電話があったのは十六人ほどだと有吉は報告し、水野が受け付けた分をふくめて、A4で六枚になった二百七十人分の名簿をさしだした。予想をこえる数である。

「お一人お一人のお名前がありがたくて、感謝の毎日でした」
有吉は微笑をうかべた。

「明日、丸山先生にもこの名簿をおみせします」

「先生、勇氣百倍ですね」

「葉書もどつきり届いているから、束ねてもってゆきます」

「何枚くらいですか」

「昨日一日で二百枚以上。この勢いだと千枚くらいになりそうです」

「千枚！ 名簿づくりが大変」

コーヒーカップへ伸ばしていた有吉の白い手がとまり、スエードのジャケットの胸の前で形よく両腕をくんだ。すこし困惑した表情である。

水野は会長として自分が運営している「えひめ移植者の会」の役員たち、「理解を求める会」が発足するまで手伝ってもらうつもりである。新しくつくる会は親睦や仲間の交流が目的ではなく、いわば戦う集団である。それだけにこの問題をよく理解した気持ちのつよい事務局長がいる。水野は理論的な光をたたえる有吉の瞳をみつめながらいった。

「移植者の会の役員さんに理解を求める会の発足を手伝ってもらうつもりです。みんなで手分けして準備です。有吉さんは事務局長として、名簿づくりを仕切ってくださいとありがたい」

「わかりました。でも名簿は時間がかかります。会の発足はいつころですか」

「明日、内藤先生と相談して決めます。遅くても今月末までには……」

「それだと名簿が完成していかないかもしれない」

「ええ、わかっています。支援してください方全員への案内は考えていません。設立総会の案内は、原則、愛媛県内のみなさんにしぼるつもりです」

「了解しました。それではもうひとつ、寄せられた意見もプリントしてきました。検討しておいて下さい」

有吉は茶封筒から三枚つづりの用紙をとりだし、水野にわたした。

すでにメールで送ってもらっているが、箇条書きに印刷された文字を読むと、批判した内容が警策でうたれたように響いた。とりわけ、水野をしばし沈黙させた一文があった。

「丸山医師は、自分が気に入った患者にだけ、移植の便宜をはかっている。不平等ではないか。移植を待つ患者はたくさんいる。二度も三度も移植をうけた人はうらやましい。支援に反対はしないが、あえて入会する気にはならない」

紙面をじっと見つめている水野に、有吉がやさしく声をかけた。

「気になさっていたら、前にすすめないわ」

「しかし、お前だけがいい思いをして、と背中をむけている人の怨嗟の声が聞こえるようで、やはり辛いな」

紙面から顔をあげると、有吉がじっと水野をみつめていた。

「だからこそ、元気をいただいたわたしたちが頑張らないと」

喫茶店をでると、日が落ち、街明かりのなかを人々が行き交っていた。

新聞社前の電停までふたりはならんで歩いた。少し待つと、勤め帰りの人々を乗せた路面電車が近づいてきた。水野にはそれがまるで光のゆりかごのように見える。

「今日はありがとう、有吉さん」

感謝の言葉がすなおに口をついた。

有吉は笑顔を返し、

「これからは裕美って、呼んでください」

と叫ぶようにいうと、電車のほうへかけだしていった。

翌日、水野は診察がすむと、手提げカバンから透明ファイルにはさんだ会員名簿と、菓子箱いっぱいになった葉書をとりだし、丸山医師にみせた。

丸山はやや切れ長の目尻をさげ、口元をゆるめて、

「こりゃ、ありがたいなあ」

と感に堪えない表情になった。

いくら世間にとはいえ、病腎移植を一方的に否定するマスメディアの報道にあおられ、糾弾の気配さえ高まってきた世論が気にならないはずはなく、丸山は気分的におこまれていた。つい先日、呉共済病院の院長が、「事実関係を明らかにしたうえで、問題があれば光田医師の処分もありうる」と発言し、瀬戸内海グループの医師たちに少なからぬ動揺を与えた。昨夜、水野がかけた電話で、「携帯に丸さんは出なくなりました。ちよつと心配ですな」と内藤は案じていた。どうみても丸山は苦境にあった。しかしかれは平静をよそおい、ふだんどおりの勤務をつづけていたのである。

名簿をめくり、葉書の束を手にした丸山の目もとにはうるんでいる。

水野も胸が熱くなった。

「病腎移植を理由に、学会は先生をつぶそうとしています」

「うむ、わかってもらえると思とったがなあ」

「学会がいうままのマスコミは毎日、批判ばかりです」

「わたしは、だれでも思いつくことをしただけじゃがなあ」

丸山は悔しそうにつぶやいた。

「先生、なにか対抗策はお考えですか」

水野が問うと、丸山は手にした葉書をめくりながら、

「そーやなあ、いまアメリカにおける藤原先生に話してみよーか」

と自信なさそうにいった。初めて聞く名前だったが、藤原はフロリダ大学医学部の移植外科教授で、丸山の市立病院時代の同僚である。

「その藤原先生とは昵懇じこんですか」

「最近は、あまり連絡しとらんが、力にはなってくれるはずじゃ」

「じゃあ、ぜひ」

「うん、話してみる」

丸山は宿題をだされた生徒のような顔をしてうなずいた。

午後、水野は診療所の応接室で内藤と会った。

丸山には切迫感がなかったが、内藤も水野も気持ちにはりつめていた。学会と厚労省は一体となって、病腎移植を否定する方向へうごきだしていたのである。

宇和島惠州会病院は、病腎移植を公表したことで、きわめて苦しい立場においこまれていた。病腎移植は丸山から保険医資格をとりあげ、惠州会病院を処分するかつこうの理由になる。

「このままだと、学会の思うツボです」

内藤の表情はさすがに渋い。

「厚労省は、また監査をやるのでしょうか」

「当然です。これでもか、これでもか、と息の根がとまるまでやってきて、徹底的に監査し処分をする。それが権力というものです」

「しかし先生、病腎移植はまちがっていません。正当な医療です。なにより、私のこのからだが証明しています」

「多くの場合、真実と現実とは別々ですよ」

内藤は苦しそうにいった。

その真実ということであれば、移植学会、泌尿器学会、病理学会、腎臓病学会の四学会は、学会のなかから二名以上の専門委員を各病院へ派遣して、専門委員会として独自に病腎移植を調査することで厚労省と合意していた。各病院の自主的な調査にまかせるのではなく、厚労省は学会が派遣する社会的に権威のある学者たちがだす専門委員会の結論を尊重するといいい、学会に都合のよい調査体制がととのえられた。

一昨日、厚労省で記者会見した多島伸一は、「(丸山医師が)患者を助けたい思いはよくわかるが、結果だけとらえて病腎移植はすばらしい、などというのはそれこそ本末転倒。(丸山医師の)患者が集まって病腎移植を正当化する会ができるそうだが、なにも事情を知らない患者をまきこみ、医療を混乱させるおそれがあり危険だ」と、さっそく「理解を求める会」をけん制していた。

このニュースは、愛媛新報でも特集でくわしく報じている。

水野は内藤に相談して、顧問、幹事、会計、監査委員はそれぞれ「えひめ移植者の会」の役員と重複させることにした。ただ有吉裕美が事務局をすることについて、内藤は賛成したものの、

「これから学会と戦いくさになりますよ。聡明な方のような方だから医学論争にも関心をもってくださると思うが、ただ一点、健康が心配です。たしか、クレアチニンが2をこえた、と聞いていました」と心配した。

水野は有吉の体調への配慮を欠いたことを認めながらも、彼女が元気であることを伝え、会報づくりや発行の作業は役員みんなでやることで了解してもらった。

「まあ会としても、彼女のような方がいると、広告塔になりますな。ケネディとニクソンじゃないが、ビジュアルは論理よりも発信力がある」

ふたりが大統領選挙を戦ったころ、内藤はユタ州立大学で政府派遣の給費留学生として研究生生活をおくっていた。白黒テレビでみるケネディは明るく希望に満ち、ニクソンはひどく陰気だった。彼女ならあのとときのケネディのように、そこにいるだけで周囲を明るくするものをもっている。有吉にたいして内藤はそんな期待をいだいた。

水野は勤め先への配慮から、会の代表をひきうけないことを内藤に伝えた。津和田からの圧力ではなく、あくまでも自主的な判断である。内藤も水野の

立場を理解した。水野はここ数日、水産会社を経営する向井原陽二を代表にしたいと考えていた。

「向井原、菊川の向井原さんですか？」

内藤は一瞬、不思議そうな顔をした。

水野は向井原のことを内藤にはなした。向井原が透析と移植手術後の療養のため、早春から夏までの半年間、まき網漁船団の指揮をとれなかった年があった。船団の漁獲高はたちまち半減し、漁船員たちは狼狽した。向井原には祖父の代からの十分な資産があるので、船団を手放してもよかったのだが、もともと漁師が好きだし、漁船員たちを見殺しにすることもできず、ふたたび船団に復帰した。そして秋から初冬までに一年分の水揚げをかせぎ、みんなを驚かせた。かれは漁師として、また経営者としても腕と人望がある。

「なるほど、その方はおそらく真珠養殖で誉れの高い向井原助一のお孫さんでしょ」

「そうですか、あの向井原助一ですか」

と水野はたしかめ、納得した。

向井原の祖父の助一は南予（愛媛県の南西部）でイワシ漁やさつまいもをつくって暮らしていた半農半漁の貧しい漁村に、あこや貝と真珠の養殖産業をおこし、戦後のひとときではあったが、南予をゆたかな漁村にした功労者である。助一の血をひく人物なら気性もつよく、権威や権力にわけもなくひれふすことはないだろう、と水野は思った。

設立総会の日時は、代表となる向井原の漁が夜であることなども勘案し、二十六日（日曜日）の午後二時とした。場所は宇和島のJA（農協）会館である。

「十八日の土曜日、午後は空いていますか」

「はい、家内と一日家にいるつもりです」

「それはいい。十月のあの事件からはあなたも忙しくされているから、奥さん孝行も大事ですよ」

「はあ、それが……」

水野はつい、久美子のことをいいだそうとして、あわてて言葉をついだ。

「土曜日の午後、何か？」

「ぜひ会ってみたい人がいます。惠州会本部の野添紘治郎さん、知っていますね」

「もちろん、お名前とお顔だけです」

この十一月、病腎問題のことで惠州会グループを代表して発言する野添事務総長のすがたは、なんどもテレビや新聞でみている。血色のよい四角い顔立ちに黒縁のメガネが似合っていた。

「午後三時に松山の全日空ホテルで会って、話してみてください。惠州会本部は理解を求める会に協力したい、といっけてきています」

「協力、ですか」

「そうです。こっちは陣痛がはじまったばかりだが、はやくもプロポーズですな」

「ありがたいことですが、どんな話になるのか、ちよつと気になります」と水野は不安をもちました。

惠州会グループは、六十をこえる病院と四百近い医療施設を擁する日本最大の医療法人である。そのひとつの宇和島惠州会病院ならともかく、海外へも進出しているこの巨大医療グループからの協力要請といわれても、雲をつかむような話で現実味がなかった。こちらがアリなら、むこうはゾウのようなものである。いのように利用されはしないか。惠州会グループは医師会や厚労省ともたびたび対立している。

水野の心中を察して、内藤がいった。

「あなただから率直にいいます。惠州会グループは今後、病腎移植を修復腎移植の名で生体腎、死体腎につぐ第三の道として推進するつもりです。そのためにまず学会と対抗して学術調査をし、実証的な医学論争を展開し、医療講演会を各地でもよおして修復腎移植の有効性を訴え、広く国民へ啓発してゆくことになります。ただこうした活動を惠州会単独でやるとなると、世間からはどうしてもバイアスがかかっているようにみられる。それで理解を求める会と一緒にやりたい、というわけです」

「一緒に、といわれても、アリとゾウでは握手もできません」

「ははは、面白いことをいいますな。ゾウは本来、優しい動物ですよ」

「ええ、ただ取り込まれてしまいそうで、心配です」

「そこは私も野添総長に念をおしています。われわれの運動の後押しをしてくださいがあればありがたい、と。惠州会は水面下で運動を支えるが、表にでることはない、と野添さんは明言しています。まあ安心なさい。ともかく野添さんと話してみてください。かれは産婆役にはなりますよ」

「先生のご意向はよくわかりました。会うのが楽しみになってきました」アリもゾウもめざすところは同じである。水たまりがあれば、ゾウにしが

みついてわたればよい。水野は理解を求める会が、このうえなく丈夫な土台にのった気がした。

めずらしく診療所の中庭まで見送りにでた内藤が、水野にさりげなく声をかけた。

「奥さん、元気にされていますか」

水野は足をとめ、空をあおぎみた。ちぎれ雲が山のいただきをこえてながれてゆく。雲のゆくさをながめながら、ためらっていた。すると内藤は、「なにかありましたか？」

と優しく訊いた。水野はいった。

「ここ半年あまり、妻が少しヘンなのです」

言葉にすると涙がこぼれそうになった。気持ちをしずめ、水野は久美子の様子を手短かに話した。若年性認知症かもしれないので、近々病院で診てもらうつもりだといった。

じっと耳をかたむけていた内藤が応えた。

「それはひよつとしてピック病かもしれません」

「ピック病？」

初めて聞く病名である。内藤はつづけた。

「MRIの独創的な撮影方法を開発した大学時代の友人が東京でクリニックを開院し、評判になっています。側頭葉の形や傷の場所からピック病かどうか診断できるのでそうです。紹介しますから、つれてゆかれたらいい」

「ありがたいことですが、東京となると……」

「いやいや水野さん、飛行機だと日帰りできます」

「そうですが、ここしばらくは会のこと、時間がとれません」

「十二月はどうでしょう？」

「今年中はちよつと無理です。年があげれば、なんとか」

「わかりました。年明け早々に診てもらえるよう、話しておきます。早い方がいい。ぜひ診てもらいなさいよ」

と内藤は有無をいわさず水野の背中をおした。

十八日の土曜日、水野は重要な人物と会った。

恵州会本部の野添紘治郎事務総長である。野添は弾たまよけにもなりそうな体格の秘書を従え、ホテルの小部屋にあらわれた。小柄だが足早でエネルギーシユである。すぐ握手をもとめられ、応じると、野添は自分の両手につつま

ように水野の手をにぎりかえしてきた。テレビでみかけるよりも、目鼻立ちがずつとすつきりしていた。いかにも頭の回転が速そうな顔である。

水野は求める会の設立総会にいたるまでの行動計画を説明した。入会申し込みは、電話と葉書をあわせて千二百名をこえていた。このうち、愛媛県内の三百名余りに明日、設立総会の案内葉書を郵送することになる。

「百名も集まってくだされば、大成功だ」

「そうでしょうか」

「患者さんが、主治医の医療をまもり、進めてゆこうと立ちあがる。たとえ十名でも、これはもう歴史的なできごとです」

「徳川理事長も同じお考えですか」

「それはもう、申すまでもありません。求める会の活動目標とわたしたち恵州会の理念は一致しています」

野添のはきはきとした言い回しには、理事長の名代といった印象があった。水野は気分がいつになく高揚するのをおぼえた。

「厚生省と学会肝いりの専門委員会は、大政翼賛会ですよ。調べるといつでも、最初から結論ありきで、まったく信用できません」

「おっしゃるとおりです。学会に都合のよい調査結果が出るでしょう」

「これは公開や公正をよそおった学会の出来レースですよ。来年の春までに、調査結果をうけた学会は修復腎移植を否定する結論をだすにちがいません」

と水野はきめつけた。

「まあ、そのとおりになるでしょう」

野添はさらりとうけとめた。みんなおりこみずみ、といった顔をしている。

コーヒーカップをひきよせ、スプーンでかきまぜ、手をとめ、顔をあげた。

「しかし水野さん、さいわい御用学者ばかりじゃありません。東京女子医大の太田和夫先生はご存知ですね」

「はい、太田先生ならよく存じ上げています」

太田は日本の人工透析治療と腎臓移植のパイオニアで、移植学会の理事長もつとめた高名な学者である。えひめ移植者の会が主催した講演会にも招いたことがある。いまは第一線から退いているが、腎不全治療の巨人と称される太田には三十冊をこえる医学関係の専門書と啓発書があり、その何冊かは水野も読んでいる。

「いわゆる病腎問題でまっさきに声をあげられたのは、じつは太田先生な

のです。病腎移植自体には、医学的にそれほどおかしなところは見あたらないし、何より患者がみんな納得しており、瀬戸内海グループがやっていることが絶対いけないとはいきれない。と、太田先生は断言されていきました」

「そうですか、太田先生は移植医療のまさに泰斗たいとです。心強いし、われわれには最高の援軍です。しかし野添さん、僕は初耳です。そんな大事な情報をこれまでまったく知りませんでした」

「それは無理もないことですよ。病腎は悪という先入観をすりこまれていく多くのマスコミは、この発言をとりあげなかった。それでご承知のとおり
の批判や否定の意見ばかりで、低俗なある週刊誌などは悪魔の移植医、というレッテルまで貼るしまつです。ただ、学会主流のこうしたなぐれはあきらかにおかしい、と思っている良識ある先生方もたくさんいらっしゃるのです。惠州会は太田先生につづいて声をあげる学者が必ず出てくる、とひそかに待っていました」

野添はコーヒーカップを手にし、ひと口のんだ。

「だれか、声をあげましたか」

思わず、水野はつづきをさいそくした。

「はい、日本の学者も捨てたものではありません。病腎を一方的にたたくのはおかしい、とある病理学者が中国新報に投稿しました」

そう応えると、野添は待機している秘書に声をかけた。

秘書は角封筒から新聞を一部とりだし、野添のそばにくると膝を折り、丁重なしぐさで手渡した。野添は社会面をひらき、大きな人物写真のはいったかこみ記事を水野にみせた。写真の人物は六十年配だろうか。ブrou型の眼鏡が学者らしい風貌によく似合っている。水野はふと、どこかで見かけたような気になったが、だれだか思いだせない。キャプションには「高見澤敬三・病理学者（広島大学名誉教授）」とある。以下が投稿された記事である。

〈私は二年前に大学を退官後、中国山地の山奥に病理研究所を設立した。この山小屋風の研究所には、約三万五千冊の蔵書と、病理医生活で蓄積した膨大な病理標本、付属資料、各種顕微鏡五台、それにラン（LAN）でつながれたパソコン三台がある。私の興味は医学の「病理学」だけに限定されていない。世の中のあらゆる病的な現象、宗教・歴史・政治・経済・教育など幅ひろい分野についても病理現象が生じてくる原因を解明したいと思っている。〉

ところで、今年の十月二日、各紙はこぞって一面トップで宇和島の臓器売買事件を報じた。臓器売買は水面下では、絶対にある、と思っていたから事件そのものにはまったく驚かなかった。問題はメディアの報道姿勢、その論調である。病腎移植が明るみになると、全紙、全テレビが同じ論調で丸山バッシングをくりひろげている。「盗人にも三分の理あり」というではないか。もし仮に病腎が間違った医療であったとしても、日本のメディアよ、そろいもそろって同じ論調の報道をして、恥ずかしくはないのか。

私は四つの全国紙に、「病腎移植はまったく新しい発想の移植医療だ。生命倫理的にも医学的にも許される。いま必要なのは、病腎移植例が何例あるのか、この実数を明らかにし、その予後を公開することが先決だ」という趣旨のメールを送り、論調を変えるように迫ったが、梨の礫つぶてである。さいわい、賢明にも地元紙が私の主張に耳をかたむけて下さった。

少し冷静になって考えてみれば、健康な人体にメスをいれて生存に不可欠な腎臓を摘出するよりも、本人にとっては有害なために取りだされた病腎が、他の人に移植できるのであれば、その方がはるかに合理的で倫理的にも望ましいではないか。病腎移植者の予後はどうなのか。私はいま強い関心をいんでいる。

読み終え、合縁奇縁あいえんきえんという言葉がうかび、熱いものが水野の胸をついた。眼鏡のおくの眼で、水野の様子をみていた野添が満足そうにいった。

「正鵠せいこくを得ている、とはまさにこのことです」

水野はなんともうなずいた。

「私も病腎移植者です。ぜひ高見澤先生にお会いしたい」というと、野添は間髪を入れずに提案した。

「求める会の講演に、お招きしたらどうでしょうか」
「なるほど、いいですね。早急に実現させます」

まだ会そのものが発足していなかったが、決まったのも同然だった。水野は内藤から恵州会本部の戦略をきかされていたが、野添はすでに具体的な戦術をもっていたのである。医療改革をめざす恵州会グループは時として、エスタブリッシュメントと闘う集団という一面ももっている。目の前の野添は戦うことにおいてもプロ中のプロである。勝つためにこの男を信じて

ついでゆこう、と水野は思った。

野添は話をひろげた。

「講演会は啓発の重要な手段になります。高見澤先生をかわきりに、移植先進国の欧米からも移植医療で第一級の学者や臨床医たちを、求める会主催の講演会講師として日本へ招くつもりです。賛成してくださいませね。もちろんすべてメディアに公開します。それから講師をまねくための費用などはいつさい惠州会で引きうけますから、心配なさらないで下さい」

「丸山先生の同僚だった藤原先生も招きますか」

「フロリダ大学の藤原志郎准教授ですね。すでに了解がとれています」

野添は当然のようにいった。なんとも動きが速い。

求める会が正式に立ち上がったら、最初の講演会の日時と場所を決めて、早急に連絡ねがいたい、と野添は注文をつけた。

準備でいそがしくしている間に、総会の当日がやってきた。

宇和島へ行くとき、水野はいつもひとりだったが、この日は三人の同乗者がいた。助手席に地元大学理学部の三谷太郎教授、後ろの席は小学校の女性教師と有吉裕美である。新顔のふたりは率先して事務局の手伝いを申し出てくれた会員だった。すでに先週は葉書の発送作業や資料の印刷など設立総会へむけた準備を手伝ってくれている。そして今日も、ふたりは他の会員たちと一緒に、会場の駐車場係りと受付をやることになっていた。

道中、話はずみ、気がつくと車は樺崎の街へはいつていた。

砲台前をとおри、水産会社の倉庫がたちならぶ手前の通りを左折して、網目模様に変化する道をすすむと、JA会館がすがたをあらわした。

午後二時、設立総会がひらかれた。

用意したパイプイスは、百二十名の参加者でうまった。脚立にテレビカメラをすえた報道陣が会場の左右と後ろのスペースを占拠した。

はじめに内藤が「中央集権は悪しき平等」と題し、次のような話をした。

移植につかえる臓器をふやす目的で、移植につかう場合にかぎって脳死を「人の死」とする臓器移植法が施行された。同時に日本臓器移植ネットワークが発足し、全国のレシピエントとドナーはネットワークで一元的に管理することになった。死亡した人間の臓器の公平かつ平等な分配をおこなうシステムができあがったのである。しかし期待に反して、脳死にともなう臓器提供は増加せず、年に1件か2件という状況である。いろいろな理由があるが、その最大のものは、官僚的発想でつくった一元的なネットワークが移植

医の「やる気」をいちじるしくそねたことにある。全国的なネットワークができる前は、移植医が仲間の医師と地域間で個人的なつながりを持ち、つねに情報を交換し、自らドナーをさがして臓器を手にいれ、自分でレシピエントを選定して移植していたため、移植医のやる気はきわめて高く、それぞれの施設・病院が移植数を競いあう状況であった。

ところが全国的なネットワークの登場は、これまでの移植医たちの努力と築いてきたシステムを無用なものにしてしまった。ドナーとの関係も断ち切られたために、死体腎の提供数も減少してしまっている。

ネットワークの指示で送られてきた腎臓を、ネットワークに登録して選ばれたなじみのない患者に移植する医師に対して、以前のように高いモチベーションをもって、と要求してもそれは無理というものだ。

このような問題意識に立つとき、いま修復腎移植こそ移植医たちが元気をとりもどす医療だと信じてやまない。さらにいうまでもないことだが、修復腎移植は移植を待ち望むたくさんの患者を救うことになる。全面的に公開された臨床研究を重ねたのちに、この移植が通常の治療となるように、われわれは国へはたらきかけなければならない。

講演のしめくりに、内藤は参加者一人ひとりに語りかけた。

「欧米では病腎は受け入れられています。いま、フロリダ大学の藤原先生が丸山先生のお尻をたたいて、修復腎移植の研究論文を書かせています。論文審査におれば、来年五月にアメリカで開かれるアメリカ移植会議、これはアメリカ移植外科学会とアメリカ移植学会が共同でひらく大規模な学術総会です、世界から数千人の専門家が集まる大変権威のある会議ですが、この大舞台に丸山先生は招かれ、発表することになります。藤原先生の見通しでは、採用される公算が大きいということです。そうなれば病腎を否定しようとしている移植後進国の日本の学会にとって、大きなダメージとなり、学会は軌道修正をしなければならなくなるでしょう。なにしろ、日本の権威は外圧に弱いですからね。」

また政官業と医療界の利権がらみの癒着の構造が、この国の腎不全対策をおかしなものにしている、と私は考えています。私はいま、腎臓病患者は犠牲者だという趣旨の本を書いています。患者のために、という医療の原点とスタンスに医師はもとより医療関係者のみんなが立ちかえらなければならぬ、と思っています」

最後列で、熱心にメモをとっている男がいた。地味な衣服を着て、背中を

まるめて聞き入っている患者と家族のなかで、その男だけひとり、スーツにネクタイをしていた。記者はこうした場ではスーツなど着ないから、ライターだろうとひと目みたとき、内藤は思った。それでよく観察すると、頭髮をきちんと七三にわけたこの男は、黒革の分厚い手帳にメモっていた。どうも正体がわからない。講演の最中は男のことが少し気になったが、話し終えて席にもどると、男のことは頭から消えていた。

男は田原克己だった。田原は先週の月曜と日曜の二日間、惠州会病院で二度目となる共同監査を指揮し、いったん帰京したあとこんどは木曜日に学会派遣の調査委員に同行して三度宇和島へは行っていった。そして昨日の土曜の夜、田原は市立病院の關係者を宇和島駅近くの料亭「ほづみ」にひそかによびだし、ながいあいだ話し合っていた。

この男が厚労省の特別医療指導監査官の田原だとは、まだだれもしらない。

講演のあと、水野が司会をし、求める会の役員を選出し、それから活動方針と会則を審議して、原案どおりに了承された。つづいて、有吉がマイクの前にたち、柳澤伯夫厚生労働大臣、中田孝造全国移植学会理事長、塩崎恭久内閣官房長官の三者に宛てた求める会の要望書を読みあげた。内容は丸山医師を中心とする瀬戸内海グループがひきつづき医療活動をつづけられように配慮をもとめ、否定されそうな修復腎移植について再考を求めるものであった。

要望書が満場一致で了承されると、代表になった向井原が設立総会をしめくくるあいさつをした。水野が用意したスピーチ原稿をそらんじ、それは堂々としたものだった。代表をひきうけるにあたって、向井原はひとつ注文つけていたのだ。

「自分は大学をでたあとは、漁師ひとすじで生きてきた。工学部で勉強したから機械にはつよいが、文章は書けん。人前でしゃべらにやならんことは、書いてもらわにやいけん。書いてもろたら、一字一句そらんじてみせる」

先週、打ち合わせのため初めて会ったとき、向井原は潮焼けした顔に森鷗外のような口髭をたっぷりたくわえていたが、その髭はさっぱりと剃りおとされていた。